



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2024年1月
第128号

漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩 (64) (岡田健嗣)	1
字式について (2) (岡田健嗣)	10
点字から識字までの距離 (121) (山内 薫)	12
漢文のページ	19
ご報告とご案内	21
編集後記 (宮澤義文)	23

漢点字の散歩 (六十四)

岡田 健嗣



勿論その読みは、古点・次点・新点を経て、またその後何百年の間の数多の歌人・研究者が行った、様々な角度からの試みを経て、私達の手元にあるものです。その読みに足場を置きながら、文字遣いを見てみたいと思います。

カナ文字は仮名文字 (15)

前回は、万葉集でも最も古い表記法を採っていると考えられている、柿本人麻呂の略体歌四首の文字表記を、見てみました。人麻呂の略体歌と言われる歌は他にもありますので、今回は、その内の四首を見てみたいと思います。

「羈旅歌」に分けられる歌で、「人麻呂歌集」にあつたものを万葉集に収録したと左注にあります。「人麻呂歌集」は、人麻呂の作歌になるものばかりでなく、人麻呂が集めた歌が収められていると考えられて、それらの多くは、人麻呂の筆が入っていると考えられています。

三一二七

度會 大川邊 若歴木 吾久在者 妹戀鴨

(前回同様、一字一字音と訓を記してみましよう。)

「度」ド・たび 「會」カイ・エ・あう 「大」ダイ・おおきい 「川」セン・かわ 「邊」ヘン・ほとり・あたり・べ 「若」ジャク・わかい 「歴」レキ 「木」ボク・モク・き 「吾」ゴ・われ 「久」キユウ・ひさしい 「在」ザイ・ある 「者」シャ・もの 「妹」マイ・いもうと 「戀」レン・こいう 「鴨」オウ・かも

度會の 大川の辺の 若久木 我が久ならば 妹恋
ひむかも

「度會」、「わたらい」は大和の地名か、「大川

邊」、大きな川のほとり、助詞「の」が省略されています。「若歴木」、読み下し文では「歴」ではなく、「久」が用いられています。若い「ひさぎ」の木、「ひさしい」の音から、「吾久在者」、「我が久ならば」、さらに私が久しく家を離れて旅をしておれば、送りがなが省略されています。「在者」であれば、「者」を助詞の「バ」と読ませています。音仮名とみます。また、ここにはありませんが、「者」は助詞の「は」にも当てられて用いられます。「妹戀鴨」、「妹恋ひむかも」、家に残してきた妻は、さぞかし私を恋しく思うであろうに。送りがなが省略されています。「鴨」が、助詞「かも」に当てられています。訓仮名です。

三二二八

吾妹子 夢見来 倭路 度瀬別 手向吾為

「吾」ゴ・われ 「妹」マイ・いもうと 「子」シ
・こ 「夢」ム・ゆめ(いめ) 「見」ケン・みる
「来」ライ・くる・き・こ 「倭」ワ・やまと

「路」ロ・みち・じ 「度」ド・たび 「瀬」ライ・
せ 「別」ベツ・わかれる 「手」シュ・て 「向」
コウ・むかう 「吾」ゴ・われ 「為」イ・なす

我妹子を 夢に見え来と 大和道の 渡り瀬ごとに
手向けぞ我がする

「吾妹子」、「我妹子を」、ここでは家に残して来た愛する妻、原文では「吾」、読み下し分では「我」が用いられています。助詞「を」が省略されています。「夢見来」、「夢に見え来(こ)と」、「夢」、「ゆめ」でなく「いめ」と読みます。「に」と「と」の助詞、「え」の送りがなが省略されています。「倭路」、「大和道の」、原文では「倭」、読み下し文では「大和」が用いられています。また、原文では「路」のところ、読み下し文では「道」が用いられています。助詞「の」が省略されています。「度瀬別」、「渡り瀬(ぜ)ごとに」、「度」を「わたる」と読んで、読み下し文では「渡」が用いられています。「別」を「ごと」と訓読しています。送りがなと

助詞が省略されています。「手向吾為」、「手向けぞ我がする」、幣帛を手向けています。読み下し文では「ぞゝる」の係り結びになっていますが、原文ではそう読ませようとしているのか、分かりません。原文では「吾」、読み下し文では「我」が用いられています。「為」を「する」と読んで、助詞・送り仮名が省略されています。

三一二九

櫻花 開哉散 及見 誰此 所見散行

「櫻」オウ・さくら 「花」カ・はな 「開」カイ
・ひらく 「哉」サイ・かな・や 「散」サン・ちる
「及」キュウ・およぶ 「見」ケン・みる 「誰」
スイ・たれ 「此」シ・これ・この 「所」ショ・と
ころ 「見」けん・みる 「散」サン・ちる 「行」
コウ・ギョウ・ゆく・おこなう

櫻花 咲きかも散ると 見るまでに 誰れかもここに 見えて散り行く

「櫻花」、さくらばな、「開哉散」、「咲きかも散ると」、咲いたかと思えば直ぐに散ってしまう、助詞・送り仮名が省略されています。「及見」、「見るまでに」、「及」を「まで」と訓読して、漢文訓読の形を採っています。送り仮名と助詞が省略されています。「誰此」、「誰れかもここに」、「見えて散り行く」が省略されています。「所見散行」、「見えて散り行く」、「所見」を「みえて」と訓読しています。また、送り仮名が省略されています。櫻花が咲いて散ると同じように、人が現れては去って行く。

三一三〇

豊洲 聞濱松 心哀 何妹 相云始

「豊」ホウ・ゆたか・とよ 「洲」シュウ・す

「聞」ブン・きく 「濱」ヒン・はま 「松」ショウ
・まつ 「心」シン・こころ 「哀」アイ・あわれむ
「何」カ・なに・いずれ 「妹」マイ・いもうと
「相」ソウ・あい 「云」ウン・いう 「始」シ・は
じめる

豊国の 企救の浜松 ねもころに 何しか妹に 相
言ひそめけむ

「豊洲」、「豊国の」、大和を離れて遠く、九州の
豊前に到達した。「洲」を「くに」と訓読して、読
みくだし文では、「国」が用いられています。助詞
「の」が省略されています。「聞濱松」、「企救の浜
松」、「きく」は北九州の地名、読み下し文では「企
救」と書かれています。原文では「聞」と、訓仮名
が用いられています。「企救」は古くから交通の要所
として知られた地名です。歌枕です。その企救の浜の
松のように深く根差して。「心哀」、「ねもころ

に」、深くする妻への思い、「ねもころ」とは「懇
ろ」、「心哀」と表記して「ねもころ」と読む、
「哀」はかなしい・あわれむの意の文字ですが、
「愛」にも、「かなしい」の訓読がありますので、
「あいする」と「あわれむ・かなしむ」のとは、根
のところを通じるのかもしれない。助詞「に」が省
略されています。「何妹」、「何しか妹に」、遠く離
れて都で待つ妻に、どのように。送り仮名と助詞が省
略されています。「相云始」、「相言ひそめけむ」、
言い合って堅く結ばれたのだったのだろうか。送り仮
名・助動詞が省略されています。

以上は萬葉集に「羈旅」として収められている人麻
呂歌集の歌です。都を発って間もないころの二首と、
旅路にあつて目まぐるしく変化する周辺の風景、その
ために地名の判明しない一首、そして九州の豊前・企
救に到って、やっと落ち着いて都の妻を偲んだ歌、全
四首です。

人麻呂歌集に収められていた歌とは、人麻呂の作歌になる歌ではないという意味が込められておりますが、恐らく人麻呂が手を加えた可能性、現在では「添削」と呼ばれる作業をした可能性は大いに有るものと考えられる歌々です。

前回見たものも今回見たものも「略体表記」と呼ばれる表記法で書かれた歌で、現代文ではかな文字で書かれる部分が欠けています。かな文字で書かれる部分、それは「送り仮名」「助詞」と「助動詞」です。しかし、ここには何も書かれておりませんが、現代文でかな文字で書かれるものに対しての意識がなかったとは、到底考えられません。なぜならば、後の訓点から見ても、係り結びや枕詞や詠嘆が、既に使用されていることを見ても、徒にそれらを後から付け加えたものとは考えられないからです。

もう一つ、略体表記でない人麻呂の歌をご紹介します。

四六

阿騎乃野尔 宿旅人 打靡 寐毛宿良目八方 古部
念尔

「阿」ア・おもねる 「騎」キ・(馬に)のる
「乃」ダイ・の 「野」ヤ・の 「尔」ジ・ニ・なん
じ 「宿」シユク・やどる 「旅」リヨ・たび
「人」ジン・ニン・ひと 「打」ダ・うつ 「靡」ビ
・なびく 「寐」ビ・いぬ・ねる 「毛」モウ・け
「宿」シユク・やどる 「良」リヨウ・よい 「目」
もく・め 「八」ハチ・やつ 「方」ハウ・かた
「古」コ・ふるい 「部」ブ・わける 「念」ネン・
おもう 「尔」ジ・ニ・なんじ

安騎の野に 宿る旅人 うち靡き 寐も寝らめやも
いにしへ思ふに

「阿騎乃野尔」、「安騎の野に」、「阿騎」は地

四七

名、軽皇子（後の文武天皇）が今は亡き父・草壁皇子を偲んで、かつて父に連れられてやって来たこの地で狩りをしたことを思い、追悼の意を込めて再び狩りをするためにやって来たこの野に、原文では「阿」が、

真草苳 荒野者雖有 黄葉 過去君之 形見跡曾来師

読み下し文では「安」が用いられています。「乃」は訓仮名、「尔」は音仮名。「宿旅人」、「宿る旅人（たびひと）」、この野に宿泊する共人ら、送り仮名「る」が省略されています。「打靡」、「うち靡き」、すっかり亡き皇子のころを思い起こして、送り仮名が省略されています。「寐毛宿良目八方」、「寐（い）も寝（ぬ）らめやも」、安らかに寝てなどいられようか、「毛」は音仮名、「目八方」は訓仮名。

「古部念尔」、「いにしへ思ふに」、「古部」で「いにしへ」と読ませています。「おもふ」は、原文では「念」、読み下し文では「思」が用いられています。「尔」は音仮名、送り仮名が省略されています。

「真」シン・まこと・ま 「草」ソウ・くさ
「苳」ガイ・（草を）かる 「荒」コウ・あらい・あれる 「野」ヤ・の 「者」シャ・もの 「雖」スイ
・いえども 「有」ユウ・ある 「黄」コウ・オウ・
き 「葉」ヨウ・は 「過」カ・すぎる 「去」キョ
・さる 「君」クン・きみ 「之」シ・ゆく・これ・
の 「形」ケイ・かたち 「見」けん・みる 「跡」
セキ・あと 「曾」ソ・かつて 「来」ライ・くる
「師」シ

「真草苳」、「ま草苳る」、「野宿をするための仮の

ま草刈る 荒野にはあれど 黄葉の 過ぎにし君が形見とぞ来し

「真草苳」、「ま草苳る」、「野宿をするための仮の

廬を設営するために草を茹る。送り仮名が省略されています。「荒野者雖有」、「荒野にはあれど」、「雖有」を「にはあれど」と、漢文の読み下しを模した表記がなされています。「黄葉」、「黄葉の」、「もみぢばの」、黄葉をもみぢばと読ませます、助詞「の」が省略されています。「過去君之」、「過ぎにし君が」、亡き草壁皇子の、「過去」と書いて、「すぎにし」と読ませています。「之」を「が」と読ませていますが、助詞「が」と「の」は、入れ替えが可能な語とされています。「形見跡曾来師」、「形見とぞ来(こ)し」、「形見」、その皇子にちなんだこの阿騎の野、その地にやって来たのだ。「ぞ…し」、係り結びです。「跡」は訓仮名、「師」は音仮名、草壁皇子を偲ぶ狩りを決行しようとしていて、亡き皇子の颯爽とした姿を思い起こしている一行である。

四八

東 野炎 立所見而 反見為者 月西渡

「東」トウ・ひがし 「野」ヤ・の 「炎」エン・ほのお 「立」リツ・たつ 「所」シヨ・ところ
「見」ケン・みる 「而」ジ・しこうして 「反」ハ
ン・タン・そる 「見」ケン・みる 「為」イ・なす
「者」シャ・もの 「月」ゲツ・ガツ・つき
「西」セイ・サイ・にし 「渡」ト・わたる

東の 野にはかぎろひ 立つ見えて かへり見すれ
ば 月西渡る

「東」、「東の」、「ひむがしの」、助詞「の」が省略されています。「野炎」、「野にはかぎろひ」、野に曙光が差し始めて、光が揺らめいて見える。「炎」を「かぎろひ」と読ませています。助詞が省略されています。「立所見而」、「立つ見えて」、かげろうが立って、「所見而」を「みえて」と読ませて、「而」は助詞「て」と読みます。訓仮名です。送り仮

名が省略されています。「反見為者」、「かへり見すれば」、反対側の空を振り返って見れば、また、草壁皇子の狩りの時と同様に。「為」は「する」、已然形「すれ」と読ませています。「者」は時を示す助詞「ば」、音仮名です。送り仮名が省略されています。「月西渡」、「月西渡る」、残った月が西の空を沈もうとしている。これも前回の狩りと同じだ。往時が思い起こされる、狩りは朝が早い。

四九

日雙斯 皇子命乃 馬副而 御狩立師斯 時者来向
「日」ジツ・ニチ・ひ 「雙」ソウ・ふたつ
「斯」シ・かく・これ 「皇」コウ・オウ 「子」シ
・こ 「命」メイ・いのち・みこと 「乃」ダイ・の
「馬」バ・うま 「副」フク・そえる 「而」ジ・
しこうして 「御」ゴ・ギョ・おん・み 「狩」シュ
・かり 「立」リツ・たつ 「師」シ 「斯」シ・か

く・これ 「時」ジ・とき 「者」シャ・もの
「来」ライ・くる 「向」コウ・むく

日並 皇子の命の 馬並めて み狩立たしし 時は
来向ふ

「日雙斯」、「日並(ひなみし)」、日と並び称される、「皇子命乃」、「皇子の命(みこと)の」、「日並皇子の命」は「ひなみのみこのみこと」、日と並ぶ帝王、ここでは亡き草壁皇子、そしてこの狩りを成功させれば草壁と同じ地位に立つことになる軽皇子を指します。原文では「雙斯」、読み下し文では「並」が用いられています。「乃」は助詞の「の」、訓仮名です。「馬副而」、「馬並(な)めて」、馬上豊かに勢揃いさせて、原文では「副」、読み下し文では「並」が用いられています。「而」は助詞の「て」、これも訓仮名です。「御狩立師斯」、「み狩立たしし」、狩りを始めた、「斯師」は送り仮名と助

詞、音仮名です。「時者来向」、「時は来(き)向ふ」、往時と同様に狩りが始まり、心の中では二重写しになる。「者」は助詞「は」、音仮名です。「来向ふ」、往時と向き合う思いがする。

* 「かり」を表す文字、原文では「けもの偏+葛」(カツ、かり)が用いられています。また、読み下し文では、「狩」が用いられています。前者はJISコードにない文字ですので、ここでは表せません。そこで、原文にも、「狩」を用いました。

以上の四首は、柿本人麻呂の宮廷歌デビュー作とも考えられている長歌の後に続く反歌として掲げられた歌です。

この狩りの主人公は軽皇子、後の文武天皇です。軽皇子は草壁皇子の皇子で、持統天皇の孫に当たります。そして、草壁皇子はその前の年に急逝してしまいました。持統天皇は、天武天皇崩御の後暫く帝位に即かず、その草壁皇子を帝位に即けようとしていた矢前

のことでした。後に即位した持統天皇の悲しみは、計り知れない物がありました。

そんな中、亡き草壁皇子を偲んで行われたのがこの狩りです。先年草壁皇子が主催して行われた狩りを、今度はその皇子の軽皇子が主催して、亡き父皇子を偲ぶというものでした。

この宮廷儀礼の意味合いの強いこの狩りに、人麻呂は供奉しました。そしてこの歌々を献上したのでした。

前回と今回の前半に掲げた人麻呂の略体歌と、後半に掲げた四首の歌、前者は人麻呂歌集からの歌とされて、人麻呂の作歌ではないとされてはいますが、しかし人麻呂の歌としても充分な厚みのある歌です。そしてその表記に於いて略体か非略体かの差があると言われています。

どのような差があるのか、比較して見るのも一興と思われます。



参考資料

字式について (二)

岡田健嗣

前回、漢点字書で文字の形を表す方法として、川上先生が考案した「字式」のあらましをご紹介しました。その「字式」に本会で使用している記号を九つ挙げましたが、さらに二つ落としておくことに気づきました。

そこでここでは、前回ご紹介した記号を、簡単に挙げて、残りの二つを、その後にご紹介したいと思います。

①+ 部首が横に並んだ場合の、左右の関係を表す。

②/ 部首が縦に並んだ場合の、上下の関係を表す。

③\ 漢字のパーツとパーツを重ねることを表す。

④・ パーツが縦に並んでいるとき、くっついている関係を表す。
くっついているのが横線であれば、一本の横線になる。

⑤> 左側の構えの中に右側の部首を入れるか、あるいは左側の部首の右下に右側の部首を入れるかを表す。

⑥< 左側の部首を、右側の部首の左下に入れることを表す。

⑦÷ 文字を上下に分けて、その間に部首を入れることを表す。

⑧@+ 伸ばした脚の上に部首を載せることを表す。

⑨- 左右の部首や画をくっつけることを表す。

以上が、前回ご紹介した「字式」で使用している記号です。
さらに二つを落としておりましたので、ここにご紹介します。

⑩@: 「@:」は、左右どちらかの対称形を、その反対側に置く記号です。



例： 渋 さんずい+止／ㄥ@:

* 「渋」は常用漢字体の形で、その旧字体は「澁」です。旧字体の字形を字式で表しますと、「さんずい+止／“止+止”」となります。音もこの「澁」の傍に由来します。そうしますと、「渋」の傍の形は、「澁」の傍「止／“止+止”」の略体であることが分かります。「ㄥ@:」は、「止+止」の略体なのです。

例： 叟 “| @:ヨ”・又

* 「叟」の音と訓は、「ソウ、おきな」です。「おきな」とは、年老いた男性のこと、瘦せたじじ、あるいは一族の長老です。「字式」で表している「ヨ」の形は、その左側にあるその対称形とともに、両手で何かをしている形を表しています。「|」はこの場合、「ヨ」とその左側にある「ヨ」の対称形との間に位置します。すなわち、「ヨ」とその対称形が、この「|」を持つという行為を表していると見てよいようです。ではこの「|」は何か、多分杖のような棒であろうと見てよいのではないのでしょうか。また、下の「又」は、右手の形です。こうしてみますとこの文字は、杖にすぎる人、老いた老人を表しているものと解されます

①①~ 「@~」は、その左側にある部首を右側の左上に、あるいは、その右側にある部首をその右上に乗せる形を表します。

例： 戔 口<+@~戈

* この「+」は「才」で、ほこ（戈）を清めた標です。「戈」の左上に「+」を置くことで、清められた「戈」を表しています。

例： 乳 ノツ@~孔

* 「孔」は乳児の頭髪を剃った形で、乳児を表しています。「ノツ」は、「爪」の略体、すなわち「手」です。この文字は、乳児の頭を手で支えながら授乳している姿を象ったものと言われます。「ノツ@~子」は、「子」の頭に手を添えている形です。

前回落としたこの二つの記号は、字式を表す記号の中でも、かなり踏み込んだものと言えらると思います。

以上、次号から、順次具体例をご紹介します。

点字から識字までの距離 (一一二一)

山内 薫

高齢者施設でのお話し会一五の方法 (一)

前回、『特別支援学校での読み聞かせ―都立多摩図書館の実践から』の「特別支援学校での読み聞かせ六つの方法」に倣って、私なりの一三の方法をご紹介したが、図書館では特別支援学級や放課後等デイサービスなどと同じように、高齢者施設にも出かけていて、お話し会を実施してきた。

そこで、高齢者施設でのお話し会で気を付けることを一五にまとめてみた。

墨田区における高齢者サービスの経緯

墨田区の図書館では一九九〇年代後半から特別養護老人ホームを訪問して本の個人貸し出しを始めた。その当時の様子をまとめたものがあるので、以下に引用する。(一九九八年に新潟県の図書館で講演したときのレジュメ)

(一) 老人保健施設秋光園からの団体貸し出しの要望と拡大写本サービス

施設の一階に赤とんぼ文庫という名前を付けられた木製の本棚がありその上に「貸出ノート」が用意してあって、自室へ持っていく人は、本の名前をそのノートに記載するようになっていく。ノートには述べ三五人(実数で一三人)が四八冊の本を借りた記録が記入されていた。その内半数以上は埼玉福祉会の大活字本であっ

た。その内Tさんが一五冊、Sさんが一〇冊、Mさんが七冊と三人で七割を占めていた。大活



秋光園の赤とんぼ文庫

字本の他「ひばり自伝」「墨田や東京関係の本」「旅行案内」「将棋」「料理」「生け花」「芝居」等の本が散見された。利用者の大半は二階の比較的自立している人で、三階の介助の必要な人の利用は一名だけであった。ただ自室には持っていないが写真集などを一階のフロアで利用する人も多いという。テープ雑誌、録音図書や市販のカセット・テープの落語等はほとんど利用されなかった。それは部屋に機器がなかったり、機器の操作が困難であるという理由の他に、耳で聞いただけでイメージを膨らませるということが苦手な人が多いからと施設の担当者は語っていた。

(施設職員から寄せられた今後の要望)

- 一、大活字本をもっと増やして欲しい
- 二、漫画(サザエさん、いじわるばあさん等)などが気軽に読めるものが欲しい
- 三、クラブ活動を行っているのでそれに関連した本が欲しい(ペーパーフラワー、リボンフラワー、籐、陶芸、アンデルセン、牛乳パック、刺し子、ちぎり絵など)

四、墨絵や習字の本

五、海外旅行の経験者もいるので、日本各地だけでなく各国の写真集が欲しい

六、神社仏閣、動物や花、鳥、山等の写真集や図鑑

七、星野富弘、相田みつをの画集

八、カ

セット・

テープは

ナツメ

ロ、民謡

等がよい

九、リ

ハビリに

使うため

のカラオ

ケの歌詞

を拡大写

本して欲

しい(銀

座の恋の
物語など一二曲と五木ひろしの唄)



秋光園貸出風景2003年

(担当者からのコメント)

入所者の中には、人とのコミュニケーションが取りずらかったり、輪の中に入れない人もいたが、本を読むことで時間が過ごせるので、施設での生活が良くなった。本を媒介にして入所者同士あるいは職員とも会話が生まれるようになり非常に良かった。(大活字本の貸出状況を見ると一人の人が借りた本を次に違う人が借りているケースがいくつも見られた)

図書館から施設の担当者が個人的にビデオを借りて見てもらっているが好評である。(鳥や動物のビデオ)

一九九八年三月三日 秋光園のひな祭りに図書館のPRと「あかとんぼ文庫」の紹介のための時間をとってもらう。そこで紙芝居をやってほしいという要望が担当者からあり、復刻版の「黄金バット」と付録のテープを持って出かけていった。待ち時間の間に痴呆のお年寄りのリハビリを担当している職員と話しをする機会があり、その職員は黄金バットを持ってきたことに非常に興味を示した。その人の話によると、現在痴呆のお年寄りのリハビリのために子どもから青年期に

かけての良い思い出を引き出す「回想法」を取り入れている。例えば、昔三味線を習っていた人に三味線の音曲を聞いてもらったが、現在の三味線の音は違うという。そこで昔の演奏をSP盤から取って聞いてもらったところ、「この音だ」と言った。三味線の弦は絹でできているが、最近の蚕は養殖の過程の一部で人工飼料を使用しているので、音が変わってきている。そうした微妙な音の差異を聞き分ける能力が潜在的に残っている。そうしたものを引き出すことによって、痴呆のリハビリを行っている。また、七輪なども回想を引き出すために使うが、新しいものはダメで、炭で真っ黒になったものでないと役に立たない。黄金バットは非常に興味があるので一緒に付いている昔の紙芝居屋さんのテープで口調を勉強して是非やってみたい。最近でた「回想法」という本の付属ビデオには、ドイツの老人施設で行われている例なども紹介されているが、ここでは舞台上にナチスの制服を着た人が登場するなどして、回想法を行っている。回想法は良い思い出を引き出す事が大切で、マイナスの記憶を引き出してしまおうと精神的に不安定になってしまう人がいる。先

日、お年寄りたち何人かが話しをしている内に、自然に東京大空襲の話になってしまい、二人のお年寄りが二日間不安定な状態に陥ってしまった。従って東京大空襲や戦争、関東大震災などについては極力触れないように気を付けている。

（われわれの感想）

黄金バットの紙芝居を持って会場（食堂）に行ったところ、一テーブルに一〇人のお年寄りがあり、テーブルが一二もある広い場所だったので、テーブルを流しながら、場面を見せて回る予定だったが、テーブルが捻れてしまつてうまく作動せず、結局マイクを使って紙芝居を行った。読み終わつた後、紙芝居の一場面一場面を各テーブルに持つて回わり、お年寄りに見てもらつた。何人かのお年寄りは懐かしがって話題にしていた。しかし、いかんせん場所が広すぎるので、今度は一〇人位を相手に是非やつてみたい。

一階と個人利用しているMさんがいる二階しか訪ねたことがなかったのだからこれほど多くのお年寄りが入所していることに驚いた。職員によれば七割の人は痴呆の人だと言う。

今回の経験から、本だけでなく、回想法を支援する様々な資料（昔の日常生活用具、昔流行つた音楽、ポスター、絵画、遊具、模型、写真、薬など）を図書館として貸し出しのできるのではないかと痛感した。

（二）特別養護老人ホーム「清風園」での個人貸出

一、相手

から言われ
た本のこと
を知らない
と会話がそ
こでとぎれ
てしまう可
能性が強
い。その反
面、その本
や作者のこ
とをよく知
っている
と会話が広
がる。（中谷宇吉郎の随筆）



清風園での貸出風景2003年頃

二、同じような興味や話題を共有する必要がある。

(例えば歌舞伎)

三、地元のことや地元の昔のことを知っていないければならない。老人ホームに入居している年寄りや地元の方が多く、「両国橋の近くに大きな碑が建っていたけれど」とか「戦前には相生町と言っていた辺りに家があつて」等の話題が会話の中で多く出てくる。現地の写真を撮ってきて見せた。

四、本にはなじめなかつたり、目の具合が悪くて本を読めない人も多いので音声資料や視聴覚資料が活躍する。

五、ナツメロなどをみんなで一緒に聞いて楽しんでる。

六、痴呆のお年寄りに、本を見せたところ「その黄色い本は、あたしの本だから返せ」と迫られる。

七、四人部屋の人間関係は複雑で、同じ部屋にいる人に対する物言いや世話の仕方などで、そこでの関係や人間性が見えてしまう。

八、本を借りていることを失念している人も多い。

九、読む人は概して週刊誌や新聞などをよく読んで

いる。

一〇、大きな活字の本がやはりよく利用される。

一一、現在のところ女性のみの利用(カセットを借りる男性一名)

清風園で借りられた資料(Fは女性、Mは男性)

F 癒されて生きる、夢について、小石川の家、日常塾確かな生き方、人生午後の時間のために、リンボウ先生の遠めがね、六十六の暦、駆け落ち(リクエスト)、やさしさが女性をかえる、妄想の森、うたかた・サンクチュアリ(最近の本も良く読む) ももこも話、カセット迷宮

F 戦争と平和、カラマゾフの兄弟(字の大きいものと言われ子供向きの抄訳一冊本を持っていく)、藤村詩抄上下

F 座右の銘(俳句、書道関係の本をよく借りる)

F 歴史と旅、演劇界、長谷川町子全集、池波正太郎の小説、名著復刻日本児童文学館(同室でいつも眠っていて歌舞伎が好きな人の分も借りて一緒に見てくれる)

F 四国八十八カ所、演劇界、浅草の肖像、歴史読

本、中村勘三郎、川口松太郎集（大活字）時代劇スタ
ー大行進

F 永代橋崩落上下（大活字本）、演劇界、豊臣家の
人々上中下（大活字本）

M カセツトテープ、浪曲百番、ふるさと、民謡、婦
系図、

F 鉄道員（大活字本）、日本の滝（写真集）

F 御宿かわせみ（大活字本）

五階

ナツメロのCD、写真集、大活字の歌詞集、大相撲へ
の招待、フクちゃん

また一九九〇年代に特別養護老人ホームでお話し会
などを実施していた図書館のレポートが二つあったの
でレジュメで紹介した。

（三）豊中市立図書館における「特別養護老人ホーム
での出前朗読会」一九九七、一、二二 OLA基本研
修会資料より

一九九四年九月から開始。月一度ホームの食堂で三
〇分間、平成三年に開いた対面朗読ボランティア養成

講座を受講した二つの市民グループが四人一チームに
なって隔月交代で出前をしている。毎回二〇〜三〇人
のお年寄りが楽しんでいる。「エッセイ、短編小説、
季節の行事風物に関する読み物、テレビの料理番組
本、絵本など」

ある日のプログラム

（「どじょっこふなっこ」など春に関連した童謡テー
プを流す）

（一）「小原流草花4月号」よりエッセイ「日本人の
桜観」（朗読の間、他のメンバーが桜の写真集を開い
て、お年寄りの間を回る）

（二）金子みすず「わたしと小鳥とすずと」より詩五
編

（三）沢村貞子「寄り添って老後」より「あそぶって
なに」「忘れる」（ロシア民謡「カチューシャ」の演
奏テープを流す）

（四）「広報とよなか」より市民からの投稿エッセイ
「思い出の歌」「白い花の咲く頃」

（五）「広報とよなか」より「とよなか人物ものがた
り・那須与一」

「エエ話やったな。来月も楽しみに待ってるぜ」と声上がる。

〔四〕特別養護老人ホームへの対面朗読サービス 国立市 東公団職員研究集会 一九七七、一、二三

特別養護老人ホームよりの依頼文

「現在、五〇名の利用者が当苑で生活を送っていますが、様々な慢性疾患や、心身障害のため生活全般に介護を必要とする状態です。その援助の柱として、基本的な生活援助の充実と、共同生活の中で豊かな人間交流や潤いのある生活への援助を課題としています。

そのような中で先般、貴館の対面朗読を知る機会を得まして、余暇生活の充実を図るため、読書会へのご協力をお願いいたします。」「普段文字情報に接する機会の少ない、視力障害者や寝たきりの利用者に、読書会を通じ文字情報を提供し、余暇活動の充実を図る。」苑では、「読書会」を一般のレクリエーションに参加できない人の代替レクリエーションと考えていたようでありハビリテーションの要素を含む。

一九九四年の六月から月二回隔週午前中の一時間ホームのロビーに間仕切りをして実施。参加者五〜七名

で全員車いすで半円形を描く。通常音訳者二名だが二、三カ月に一度は図書館員も行う。一時間読みっぱなしだと全員眠ってしまうので、短い小説やエッセイで読んだことよって雑談がもてるようなもの。はじめの頃には全く反応がなく、半数以上は気持ちよく眠っている。何度か続けていく内にこちらが持ち出した話題にのって話してくれたり笑い話の落ちのところであつてくれたりするようになる。文中に歌が出てきたりすると普段黙っていた人が突然その歌の一番から三番までを歌いだしたり、戦争中の生活を綴ったエッセイを読んでいたらボロボロと涙をこぼす人がいたりと手応えを感じるようになった。苑からの要望で長いものにも取り組みはじめ子供向きの「東海道中膝栗毛」を毎回少しずつ読むようなこともしている。

個人利用を呼びかけたが、集団生活をしていてとても忙しいこと、自分だけが特定のサービスを受けることに非常に気を使うなどの問題から利用してもらえない。

推古朝の文章（日本書紀より）

十七条憲法

一ニハクテヲシシト
 以レ和ヲ為レ貴、
 無キヲフルコトヨ
 忤為レ宗。人皆有レ
 党。亦少ニ達者。是以、
 或ハ不レ順ニ君父。乍違ニ
 于隣里。然レトモ和ヲ下
 睦、諧ニ於論一事、則チ事
 理自通。何事不レ成。

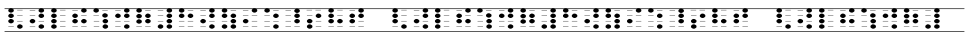
大修館書店『漢文名作選』第2集
 5日本の漢詩文参照

一に曰わく、和を以て貴しと為し、
 忤うることを無きを宗と為よ。人皆
 党有り。亦た達る者少なし。是
 を以て、或いは君父に順わず。
 乍た隣りに違ふ。然れども和
 和らぎ下睦びて、事を論うに
 諧うときは、則ち事理自ら通
 う。何事か成らざらん。

人みな党（たむら）あり

人はみな、仲間を作り、党派をなし、
 考えや利害は一樣ではない。

聖徳太子の作と伝えられる十七条憲法の
 全文は、『日本書紀』に記されている。



一 二 日 ハク、以 テ 和 ヲ 為 シ
 貴 シト、無 キヲ 忤 フルコト 為 ヲ
 宗 ト。人皆 有 リ 党。亦 タ 少
 ナシ 達 ル 者。是 ヲ 以 テ、或 イ
 ハ 不 順 ハ 君 父 ニ。乍 タ
 違 フ 于 隣 里 ニ。然 レドモ 上 和 ラ
 ギ 下 睦 ビテ、諧 フトキハ 於 論
 フニ 事 ヲ、則 チ 事 理 自 ラ 通
 フ。何 事 カ 不 ラン 成 ラ。

「融和・和合の大切さを説いているが、これは古代国家の成立期、血で血を洗う権力抗争に巻き込まれざるを得なかった太子の悲願であったに違いない。」
 (大修館書店『漢文名作選』より)



推古天皇

554～628年

聖徳太子(厩戸皇子)
 用明天皇の第二皇子
 おばにあたる推古天皇の
 摂政として、冠位
 十二階の
 制定、
 仏教の
 興隆、
 遣隋使の派遣
 など、内外の政治に
 力を尽くした。



574～622年



毎年この時期になりますと、

横浜漢点字羽化の会では、横浜市中心図書館に納入する漢点字書の製作の最終段階に差し掛かります。今年度も以下の図書の漢点字訳書を納入する予定です。

今年度は、前年度に積み残しました図書、『古事記』（次田真幸（つぎた・まさき）校注、講談社学術文庫）の下巻・四分冊と、『諸注評釈新芭蕉俳句大成』（佐藤勝明編、明治書院）の頭の部分、第一分冊から第三分冊までの納入を予定しております。

『新芭蕉俳句大成』の紹介文に「編者 堀切実・田中善信・佐藤勝明」、「編集委員 藤原マリ子・玉城司・金田房子・深沢眞二」とあります。

以下に、有名な「あら海や」の句のその解説の抜粋を収めます。

あら海や佐渡によこたふ天河

（真蹟懷紙）

【考】 元禄二年（一六八九）年七月上旬、北陸行脚中の作。季語は「天河」で秋。『曾良書留』の前書に「七夕」。『俳諧勸進牒』には「いづもぎきにて」の前書があり、同内容の前書や文章を備えるものが多い。『曾良日記』によれば、出雲崎に泊ったのは七月四日で、七月七日は高田に逗留。版本初出の『其袋』では直江津での作と暗示される。『本朝文選』所収の俳文「銀河ノ序」では、金山があり流刑の地でもあった佐渡の歴史を記し、自らの旅愁を吐露した上で掲出。『おくのほそ道』ではそうした記述の一切を省き、「酒田の余波、なごりき日を重、かさねきて、北

陸道の雲に望、のぞむ。遙々、ようようのおもひ胸

にいたましまして、加賀の府まで百廿里と聞、きく。鼠

の関をこゆれば、越後の地に歩行、あゆみきを改、あ

らため*_Bて、越中の国一ぶりの関に到る。この間九

日、暑湿の勞に神、しんきをなやまし、病、やまいき

おこりて事をしるさず」とし、「* 文月や」句と並

記する形で掲出。

【解】 荒波が立つこの海の向こう、佐渡が島にか

けて天の川が大きく横たわっている、の意。「よこた

ふ」は文法的に「横たはる」とあるべきところなが

ら、「横たふ」を自動詞として使った例も報告され、

蜂矢清人「横たふ考」（「文法」一九七〇・三）な

ど、漢文訓読の影響であることも指摘される。また、

この時期の銀河は佐渡方面に横たわらないとの指摘

（荻原井泉水『奥の細道評論』等）に対して、現在の

大勢は、まったく方角が違うわけではなく、事実には拘

泥し過ぎる必要はないとする。

（中略）

【評】 「よこたふ」の表現については、漢詩の影

響であるとの認識がほぼ共有されており、七夕時に銀

河は佐渡に横たわらないという点は、問題にしないの

が最近の傾向。これらに新たな視点をもたらす『金田

前書』の指摘は、貴重で示唆的。各前書や文章との関

連で、位置づけがどう変わるかという視点が不可欠の

句であり、『全講』『安東芭蕉』『堀切ほそ道』『金

田前書』などを参考に、さらに追究することが求めら

れる。「佐藤勝明」

編集後記

明けましておめでとう
ございます。

皆様は新年をどのようにお迎えになられたのでしょうか。

新年早々、能登地方を襲った震度7の大地震、羽田空港での飛行機どうしの衝突炎上事故と悲しい、つらいニュースが飛び込んできました。特に、能登地方の地震は、TV等の地震情報を見聞きするたび被害が広範囲に、深刻さが伝わってきます。被災された方を思うと気持ちが悪みます。思えば29年前、西宮に住んでいたころ、関西淡路大地震が脳裏に浮かびました。一瞬にしてダンスなどほとんどが倒れた。幸運にも、家族にけがはありませんでした。時は進みましたが、自然災害を予知することは不可能。普段からの防災、減災が大切と感じるようになりました。

今年は辰年、龍神の力で災難や争いを吹き飛ばし、明るい、平和な年に転じたいものです。

宮澤義文

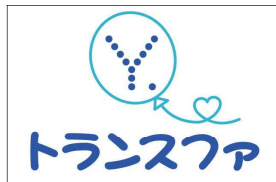
(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は2024年4月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。